

Title	漢文大蔵経の歴史：特に宋元版大蔵経について
Sub Title	History of the Complete Collection of Buddhist Sutras, Laws and Treatises in Classical Chinese, with Special Emphasis on the Song and Yuan Eras
Author	竺沙, 雅章(Chikusa, Masaaki)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2002
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.37 (2002. ) ,p.1- 31
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	神田寺記念公開講座「書物と日本仏教」第一回(二〇〇二年十月十八日)
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20020000-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20020000-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

神田寺記念公開講座「書物と日本仏教」第一回（二〇〇二年十月十八日）

## 漢文大藏經の歴史

——特に宋元版大藏經について——

竺 沙 雅 章

ただいま紹介にあずかりました竺沙でございます。

「書物と日本仏教」という連続講座の第一回の講師にご指名いただきまして、大変光栄に存じております。ただ、私自身は中国のことを勉強してまいりまして、日本仏教のことは非常に不案内でございます。今日の話も、中国の仏典、大藏經の話でございますが、それと日本仏教との関係についても、できるだけ述べさせていたいただきたいと思っております。

はじめにお断りしておかねばなりません、予告では「漢文大藏經の歴史」というだけの題にいたしました、とても一時間ぐらいでお話しできませんので、その中でこちらが得意としております宋元版の大藏經のを中心にしてお話ししたいと思います。

資料は、レジュメと図版とに分けております。両方を見比べながら話を聞いていただければありがたいと思います。はじめに、私は中国の歴史を専攻しておりますが、漢文大藏經、あるいは漢文の仏典の書誌的な研究というものに

関心を持ちましたのは、若い時、京都大学人文科学研究所で敦煌文献研究班というのがつくられ、それに参加させてもらってからでございます。それは、ロンドンにありますスタイン本の敦煌漢文文献の写真が日本にもたらされ、その焼付け写真によって文献の調査、研究を行なうという研究班であります。その班長は、先年亡くなれましたが、有名な藤枝晃先生であります。

ご存知のように、敦煌から出ました文献の八、九割は仏典であります。しかもその仏典の中で完全なものは少なく断片が多い。研究班では、その断片が何経であつて、『大正新脩大藏経』（以下、『大正藏』）の何巻の何頁の何行目から何行目までであるということを調べる、という作業（同定作業）を行ないました。

私自身は、その中で般若經典を担当するように言われました。般若經典と『大正藏』とを調べておきますと、どうも敦煌写経と『大正藏経』とは合わない所が多いということがわかりました。『大正藏』というのは、ご存じの方も多いと思いますが、それが定本にしましたのは『高麗大藏経』の再雕本であります。それが一番テキストとして優れているというふうに言われておりました。今でも、仏教学の方ではそういうふうに言われております。ところが敦煌写経なんかと比べると、必ずしもそうとは言えないのではないかと、実はそういう疑問を持ちました。

そのあと、同じ研究班で大阪の四天王寺の管長であられた出口常順氏が所蔵しておられました吐魯番出土仏典の調査も行ないました。その時には、私には木版本の仏典を調査するように言われました。そこで版本を調べておりましたら、中国の大藏経で残っておりますものは、みな全部版本であります。その版本の大藏経の研究というのは明治以来行なわれてはいますが、どうも中国の版本学の方法が取り入れられていないという欠陥に気づきました。そこで私は、宋元時代に出版された大藏経の系統を三つに分けるといふ作業を行ないました。それは私が最初だったわ



図1 『諸仏要集経』『西域出土仏典の研究』による。

けですが、そのことを最初に発表しましたのは「契丹大蔵経小考」  
 『宋元仏教文化史研究』汲古書院、二〇〇〇年所収）という短い  
 論文でございます。それ以後、私自身、大蔵経の分類とか流れと  
 いうものに関心を持ちまして、いろんなところでお話ししたり、  
 あるいは文章をつくったりいたしました。

つい最近も、大谷大学から出しております「仏教伝来」（二〇  
 〇一年）に、これは大勢の人が書いているのですが、「大蔵経編  
 纂」というものを書きまして、そこで一応の中国での大蔵経の流  
 れを略述いたしました。今日の話もこれまで申してきた、そうい  
 うもの的一部でございまして、あまり新しい話ではございません。  
 ただ、最近の情報も加え、そして特に日本との関係に重点を置き  
 ながら、お話を進めていきたいと思っております。

仏教が中国に伝来しましたのは紀元前後といわれておりますが、  
 二世紀の中頃になりましたら安世高に始まって仏典の漢訳が行な  
 われるようになります。漢訳されますと、それが書写されました。  
 それはすぐに書写されていたものと思われませんが、現在知られ  
 ている一番古い写経というのは、図1に載せました『諸仏要集経』

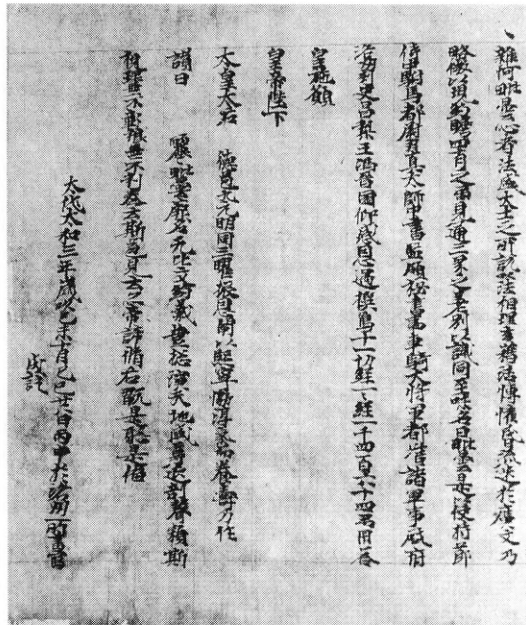


図2 『雑阿毘曇心経』(S. 0996)

というものであります。これは大谷探検隊が中央アジアで収集したものでございまして、その奥書によりますと、元康二年という年に竺法護という人が訳したもので、元康二年というのは二九二年です。それを書写したのは元康六年(二九六)。これは翻訳して四年後に書かれたものであり、ともかく飛び抜けて古い写経であります。これは大谷探検隊が日本に持ち帰りまして、『西域考古図譜』(一九一五年)にも図版が載せられたのですが、現在それがどこへ行つたのか所在がわかりません。非常に残念なことであります。書体なんかをご覧になりましたら、漢代の隸書の風が非常に濃厚に残っていることがわかると思えます。

かると思えます。こういふ古いお経が中央アジアから発見されました。敦煌の写経で申しますと、四世紀のものも見られるものもあります。それらは年号がありません。年号の最も古いものは、四〇六年に書写しました、『十誦比丘戒本』(S. 0797)というものであります。

これらの写経はまだ一行一七字という標準タイプのものではありませんで、一八字、一九字とか、一行の字数はば

らばらであります。そういうものが一行一七字の標準形式の写経になったのは、五世紀の中頃であったと思われる。それは敦煌写経からそういうふうに見えるわけでありまして、その中で一番年号がはっきりしておりますのは、  
図2 『雜阿毘曇心經』(S. 0996)。実は現在は『雜阿毘曇心論』と言っているものですが、その巻第六で、北魏の太和三年(四七九)に書かれたものです。これはSとありましてスタイン本、つまり大英図書館に所蔵されているものであります。

これには非常に長い奥書がありますが、その四行目の上のほうに昌黎王馮晋國とあり、彼が施捨した写経であります。それにつづいて「十の一切経を写す」と書かれていまして、これが「一切経」という言葉が出てくる一番古い資料であります。しかも一つの一切経のお経は「一千四百六十四写」一番下の「弓」みたいな字は「卷」という字の古い字体です。これは非常に重要なことでありまして、この時期に一切経という形で書写されていたことが知られます。そして、馮晋國という人は、本名を馮熙といい、彼は『魏書』卷八三上に伝があります。また、この奥書に太皇太后というのが出てまいります。これは馮熙の妹になります。つまり、彼は北魏朝廷の外戚になるわけです。彼については、香港の大学者であります饒宗頤先生に『魏馮熙与敦煌写経』(『選堂集林・史林』上)という論文があります。つまり、この時期に一切経というものが確実につくられておりました。一切経にするには規格を定めなければなりません。この頃から一行一七字という標準形式ができました。これ以後、写経は一行一七字というものが定式化いたします。日本の写経も皆そうであります。

「一切経」という名称がこの頃から始まりまして、中国では唐代ぐらゐまで使われます。日本では天平写経をはじめ、ずっと「一切経」と言われてきました。現在も日本の大蔵経の研究者は、みな「一切経」と言っています。とこ

ろが、我々中国のことをやっております者は、「大藏經」と言います。大藏經という呼び名はいつ頃から言われるようになったのかといえますと、そこに資料として南朝の末の陳の正史の資料を出しておきましたが、「藏經」という言葉が「陳書」卷二七、姚察伝の中に出てきます。「初、察願読一藏經」姚察が一藏の經を読まんことを願ったとあります。大体この頃から藏經の語が始まり、唐代には、大藏經あるいは藏經というのと、一切經というのと、両方が行なわれておりましたが、宋代以後になると、大藏經というのに定着いたします。中国では、道教の大藏經を「道藏」と申しますが、それと區別して「釈藏」とか「仏藏」というふうにも申します。

一切經と大藏經とは、大体同義語のごとく言われますが、厳密に言うと、実は少し違います。一切經というのは全ての仏典という意味です。ところが大藏經と言うと、それぞれの寺の經藏に納められたお經のことです。その場合には、一切ではありません。經典を大藏經に入れるには、中国では勅許を必要とします。つまり、大藏經の中に入っているのは正しいお經で、偽經とか別生經とか、そういうものはその中には入らない。選択されたお經のセットが大藏經、藏經になります。ですから、一切の經というのとは、ちよつと意味が違ふものであります。

ところで、今日は、その中で大藏經というふうになりました、宋元版の大藏經についてのお話をしようと思つてわけがあります。

木版印刷がいつから始まったのかというのは大問題で、昔からいろんな議論がございますが、現在では、唐の初めごろから行なわれるようになったと言われております。敦煌文献の中からも、印刷した仏典なんかが発見されておりますが、それは大体九世紀ぐらいからのものが残っております。そして、宋の時代、一〇世紀の後半になりまして、大藏經を木版で出版することが始まりました。宋から元の時代にかけては、幾つもの木版の大藏經がつくられま

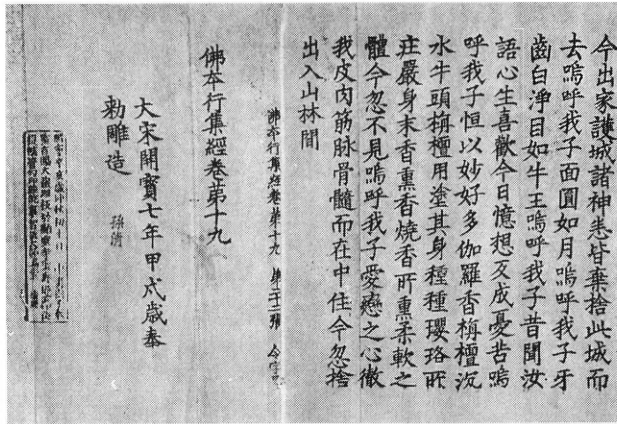


図3 開寶齋『仏本行集經』卷第十九（南禪寺所蔵）

した。一〇種類近くつくられております。私はそれを、先程申しました三つの系統に分けました。

そのうちの第一類というものの特徴は、毎紙二三行行一四字、卷子本で、それに大藏經の場合には、整理番号として千字文帙号、千字文の帙番号が付きます。大体一〇巻で一帙。それに帙ごとに整理番号を付けていく。つまり天地

玄黄というふうに番号を付けてまいります。「開元釈教録略出」(「大正藏」巻五五)に千字文帙号が付いているのですが、この第一類のものは、それよりは一字繰り上がるというのが特徴であります。

第一類のもので一番最初のもものは「開寶藏」。日本ではこれを「勅版」と言ったり、「蜀版」と言ったりいたしております。これはもうなくなつてしましまして、現在、世界で見られるものは、日本と中国におよそ一二巻ぐらいしか残っております。日本には二巻しかありません。

「開寶藏」が注目されましたのは、「仏本行集經」というのが南禪寺から発見されてからであります(図3)。これが発見されて非常に注目を集めました。これは、京都で行なわれた第二回の大藏会に初めて出展されました。

「開寶藏」というのは中国での呼び名であります。文献では、開寶四年(九七二)につくられたというのと、開寶五年から始まったという二つの記事がありました。



私は、はじめ開宝五年説を採っていたのですが、一九九三年に、山西省の高平県という所から『法華經』卷七が発見されました。『開宝藏』の場合は、「大宋開寶何年に勅を奉じて雕造した」という刊記が入っておりますが、それには、開宝四年とありました。ただ、この『法華經』には千字文帙号が付いていないのです。『仏本行集經』の場合に、版心の所に、下のほうに「令字号」というのがあります。これが千字文帙号なのです。ところがそれには、そういうものが付いていない。だから、四年から始まったにしても、本格的にこの大藏經の出版、版木がつけられたのは五年からであったと思われる。そして、完成しましたのは、太平興國二年（九七七）ころであったと思われる。これは私の説であります。そのできました版木、全部で十三万余枚といいますが、これがつくられたのは成都で、都の開封に運ばれたのが同八年（九八三）でありました。概説には開宝四年から始まって太平興國八年に完成したというふうに書かれていますが、実際は二年であります。

版木が都に運ばれるその前の年に、朝廷では訳經院をつくりました。これはあとで伝法院と名が改められました。そして、八年に版木が送られてきますと、印經院が設置され、そこで印刷が行なわれるようになります。出来上がった『開宝藏』は、国内の大きなお寺に置かれるとともに、周辺の諸国にも下賜されました。それを最初にもらいましたのは、日本の入宋僧奝然であります。彼は九八四年に宋に入りました。ちょうど『開宝藏』ができた明るる年です。彼はその『開宝藏』を皇帝からもらいました。そして京都に持って帰りました。奝然は有名な嵯峨の清涼寺の本尊であります釈迦瑞像を中国でつくって、それを持ち帰りました。いま清涼寺にそれが置かれております。大藏經の方は、持つて帰りますと、それを藤原道長に寄進いたしました。そして法成寺——京都御所の東側に道長の建てた寺、かなり大きなお寺であったらしいです——の經藏に納められました。しかし、この寺は一〇五八年に全焼いたしました。

正覺善王白佛在顯世尊說諸佛名字在  
 方佛為善王說諸佛名字方字一千數之  
 有長而與三發意二品重說皆屬惠業  
 而止以此二品檢之有以二字為名者三  
 字名者有以他字足成音句非其名者  
 亦時有字夾異者相梵本一月特是出  
 經人轉其辭今有右右巴長而有者當  
 以四百五十六字為名方巴與三發意不  
 名自惠業以下難可詳已余今別其可  
 了各為佛名意而不了則全舉之又以  
 字異者注之於下庶或能令各夫所殊  
 見達士真有覽者可為改定恕余不  
 達

出三藏記集序卷第十

大宋開寶九年丙子歲奉勅雕

造太子興國八年奉勅中

經一五

【出三藏記集】卷一一（七寺所藏）

功德歷作如是清淨懺悔上來布盡禮佛  
 綱軌次第多少慈是救信行禪師依經自  
 行此法於今日從信行禪師依經自行此法  
 法於眾以常相續依行不絕但以現无互文  
 流傳恐欲學者无所依據是以故集此文  
 流通於世願後學者依文讀誦不增不減  
 佛說三厨經  
 一氣和太和一得一道每太 和乃一先和  
 去理同玄澗 莫將心緣心 還莫住地緣  
 心在莫緣心 真則等真則 精利至離心  
 積簡不快離 志知簡有心 已繁无已智  
 諸陰蒸結氣 非諸及愛結 氣隨諸本氣  
 隨取當隨泄 止不來无思 念思知有思  
 是法如是持

集諸經禮懺儀卷上  
 大宋太平興國二年  
 奉勅雕造太平興國  
 八年奉勅中  
 大宋太平興國二年  
 奉勅雕造太平興國  
 八年奉勅中  
 大宋太平興國二年  
 奉勅雕造太平興國  
 八年奉勅中

図4 『集諸經禮懺儀』卷上（七寺所藏）

恐らくこの時  
 に、『開宝蔵』  
 も焼失したと  
 思われます。  
 ただ、新し  
 い大蔵経が伝  
 来したという  
 ので、周辺の  
 寺々ではそれ  
 を争つて書写  
 したようであ  
 ります。現在  
 いろんな所で  
 一切経の調査  
 が行なわれて  
 おりますが、  
 その中には法

成寺にあった「開宝蔵」から写した写経がかなりたくさん残っています。図4は「出三蔵記集」と「集諸経礼懺儀」巻上。これはどちらも名古屋の七寺の写経であります。図版をご覧になりましたら、「出三蔵記集」の一番終わりの所に「大宋開宝九年丙子歳奉勅雕造」とあり、これは前の南禅寺のと同様であります。ついで、「太子興国八年奉勅印」とあります。「太子」というのは「太平」の間違いです。「集諸経礼懺儀」の方も同じように書かれています。これどちらも法成寺で書写したものです。ただ、「開宝蔵」は一行一四字ですが、これはどちらも一六字。ほかには一七字で写しているものもありまして、きちっと正確には写していないようであります。後者の場合には、一番終わりの所に「安元参年」という年が入っています。これは一一七七年。書写したのもう一つの写しのようであります。こういうふうには、日本に新しい大蔵経が入ってきたというので、非常なセンセーションを巻き起こして、多くの寺でこれを写したということが知られるわけであります。

「開宝蔵」はずっと印経院で印刷されていたのでありますが、熙寧四年（一〇七二）に印経院が廃止になりました。これは王安石という政治家が行財政改革を行ないまして、今の民営化と同じでありまして、印経院は財政の負担になるといので民間に払下げになり、そこで開封の顕聖寺聖寿禅院に版木が移されました。しかし、その印刷の権限は朝廷が握っておりまして。ちょうどそこへ、成尋という僧が入宋いたしました。彼は奮然がもらつて帰つたあとの部分——追離分をもらいました。彼に「参天台五台山記」という日記がありますが、その中に次のように書いています。「宮中不許外国收贖」当時宮中では外国の收贖を許さず、すなわち外国人が「開宝蔵」を購入して帰るのを許さなかつた。だから、成尋も神宗皇帝の許可を受けて、これをもらつて帰つてきたことになります。

ただ、成尋は中国で亡くなります。その前に弟子たちが帰るときに、「参天台五台山記」と、手に入れたいろんな

仏典等を日本に持って帰らせました。この時入手した「開宝藏」の追雕分も日本に渡ってきたはずなのですが、現在それは残っておりません。「開宝藏」は、その後も大観二年（一一〇八）ぐらいまで、ずっと印刷が行なわれておりました。「開宝藏」は日本だけではなくて、高麗に伝わりましたし、西夏にも伝わりました。

図5 「蘇悉地供養經」というのがあります。これは出口常順氏所蔵のもので、明らかに「開宝藏」経巻の断片であります。五行目の、二字目に「殷」という字があります。その最後の「又」となる所が一画欠けております。これは

遍從五字至十五字一一字數誦落  
又遍十五已上至三十二字誦三落  
又數過此者誦一乃遍於一一時如  
法念誦其數畢已隨所懷願及以成  
就殷勤求之護本尊者佛部之中以

第八張

図5 「蘇悉地供養經」（故出口常順所蔵）

太宗の父の名前趙弘殷の「殷」の字を避けたものです。仏典の場合はそういう皇帝の諱を避ける必要はないということが唐の時代から定められておるのですけれども、『開宝蔵』の場合には、宋の太宗までの諱の字を避けることが多く、これもそれを証明しております。これはトルファンから出てきたものであります。

つい最近、京都大学の西脇常記氏が『ドイツ将来のトルファン漢語文書』（京都大学出版会、二〇〇二年）という本を出されています。その中に、宋の太宗が著した「御製縁識并序」（Ch/U8185）が引用されております（六七―七〇頁）。これには千字文帙号の「亭字号」が刻されていて、『開宝蔵』の追離分であることがわかります。こういうふうに、『開宝蔵』は日本にも伝わりましたが、西の方、トルファン、中央アジアの方にまでそれが伝わっていたということがわかります。

日本では『開宝蔵』を書写いたしました。高麗の場合は、それを覆刻いたしました。その辺がやはり文化の違いであると思います。『高麗蔵』というのは「麗本」というふうに呼んでおりました。『大正蔵』の底本になりました。初雕本と再雕本とがあります。初雕本は顯宗二年（一〇一一）頃に開始され、宣宗四年（一〇八七）に完成しました。初雕本はあまり残っていないので、南禅寺に約一七一五巻、韓国の方に一九九一年現在、九一種一四七巻あります。ただ、去年韓国の人に聞きましたら、韓国でまた大量に発見されたということです。しかし全体からしましたら、わずかなものが残っているだけであります。初雕本は符仁寺という寺に版木が置かれたのですけれども、モンゴル軍の侵攻によって焼失してしまいました。『高麗蔵』は『開宝蔵』の覆刻でありますけれども、南禅寺なんかにある『開宝蔵』は上下の野線がありませんが、『高麗蔵』は上下に野線があります。それから、版心の丁数が第何張となっているのですが、『高麗蔵』の場合、初雕本は第何丈というふうになっているといった違いがあります。

初雕本はモンゴル軍の侵攻によって焼失しました。そこですぐに再雕して、高宗二十三年（一二三六）から始めて三十八年（一二五二）に完成しました。この版木はいまも海印寺に残っており、『般若心経』なんかを刷っております。これを再雕本と申します。その時に、守其らが『高麗国新雕大藏校正別録』というものをつくりました。再雕するときに、国本、これは高麗本、それから丹本すなわち契丹本、宋本というような、いろんな大藏経を校勘しているわけです。そこで、高麗再雕本がテキストとして一番優れているという評価が生まれてまいりました。

そういう評価が誰によってつくられたかと申しますと、これは日本の僧でありまして、寛永三年（一六二六）から七年（一六三〇）の間に獅子谷、今の法然院の忍激という人が、建仁寺にありました『高麗藏』と法然院の黄檗版——黄檗の鉄眼一切経——とを校合いたしました。彼は浄土宗の僧ですが、文政十年（一八二七）から天保八年（一八三七）にかけて丹山順芸、彼は浄土真宗、東本願寺の方の僧で、彼も本山の命を受けて校正を行ないました。ところが、彼は途中で亡くなりまして、子の順尊の時に完成しました。そして安政三年（一八五六）に本山に献上しました。その校正したものが、現在は大谷大学に所蔵されております。大藏経の本格的な校合を行なったのが江戸時代の日本の僧たちであったことは、注目すべきであると思います。明治になりまして、活字本の大藏経がつくられました。『大日本校訂縮刷大藏経』——「縮蔵」と言っております——がつくられるとき、その底本はやはり麗本の再雕本でありました。これは増上寺のテキストを使用しました。そしてそのあと、大正から昭和の初めにかけて、『大正新脩大藏経』がつくられました。このときも当然、麗本が底本になりました。つまり、麗本が最も優れたテキストであるという評価、それは日本の江戸時代の学者に始まって、そして、現在までそれが続いているということであり、ます。

高麗では、初雕本のあとに統藏経がつくられました。それは義天（一〇五五―一一〇二）という国際的学者で、高麗の文宗の第四子であったのですが、出家しまして、中国に留学して仏教学を修めました。帰国してから、その当時存在していました古今の章疏類（仏典の注釈書類）を宋から、その時代北にありました契丹からも集め、日本にもその情報を求めております。そういうふうにして、その当時の、いわゆる注釈書類を収集いたしました。『新編諸宗教藏総録』という目録をつくりました。これは現在「義天録」と申しております。その目録によりまして、大安七年（一一〇九）から壽昌年間（一一〇九―一一一〇）にかけて、出版を行ないました。これについては、大屋徳城という人に『高麗統藏雕造攷』（便利堂、一九三七年）という大きな研究書があります。

『統藏経』本も日本に早く伝わってきております。その中で現物が完璧に残っておりますのは、東大寺にあります。『大方広仏花嚴経随疏演義鈔』というものであります。これは全部で二〇巻ですが、一巻がものすごく長いものです。これが完全に残っております。

図6が東大寺にありますもので、これが出版されたのは一〇九六年ぐらいです。それが、保安元年（一一二〇年）には、覚樹という僧によって日本にもたらされました。そして、東大寺に宗性という有名な学僧がおりますが、彼が多くの識語を書いております。そして、「寄進普門院常住 施主大法師 正算」とあります。この人が文明十二年（一二八〇）に寄進したという識語であります。これは現在も残っておりますが、実はこれのルーツになるものが近年になって発見されました。そのことについては、あとで述べます。

『開宝藏』系統の第三番目が『金藏』。中国では「趙城藏」とも申しております。これは、これまで全然知られなかった大藏経であったのですが、一九三三年、昭和八年に山西の趙城県広勝寺という所から発見されました。それでこれ

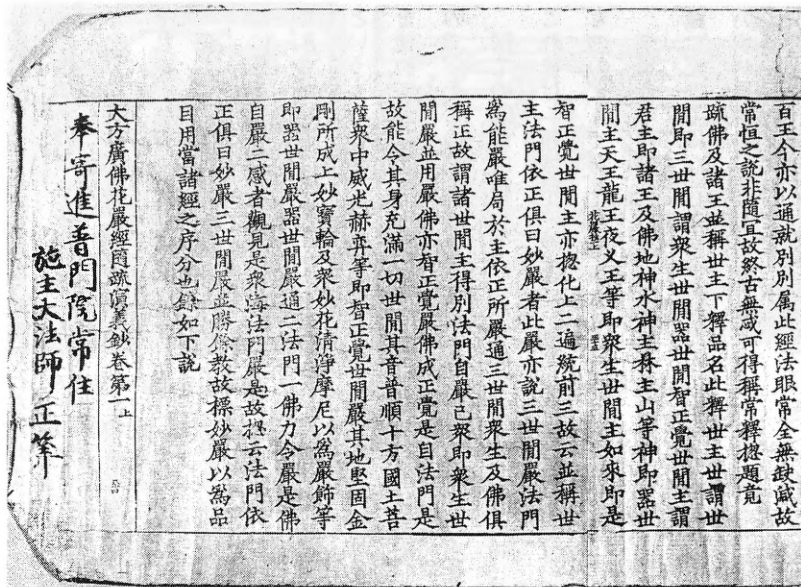


図6 高麗統藏經本「大方廣花嚴經隨疏演義鈔」卷一上（東大寺図書館所蔵）

を広勝寺本と言います。

趙城県というのは、山西の太原よりずっと南に下がって行った所に臨汾という都市がありまして、そこを少し上がった所にある寺であります。私も八六年にここへ行つてまいりました。

その広勝寺という寺には飛虹塔という非常に立派な塔があり、その一階は経蔵になっています。そこに金の時代につくられた大蔵経が入っています、それが発見されたわけです。

山西省というのは日中戦争のときに大激戦の行なわれた所でありまして、今も旅行しましたら、あちこちにその戦跡が残っていて、通訳の人によると、トーチカなどもまだ残っているそうであります。そういう激戦区でありましたが、日本軍が貴重な「金蔵」を持ち出そうとしているという噂が立つたらしい。そこで八路軍が一九四二年四月の夜にそれを持ち出し、太行山脈の中に疎開させました。戦後になって、これを北京図書館に移送いた



しました。そして、そこで整理が行なわれました。北京図書館は、現在、中国国家図書館と名前が変わっております。このほかに、一九五九年にチベットのサキャ北寺——ラサより少し西の方の寺——で、また『金藏』が発見されました。これは宝集寺本。宝集寺というのは元の大都、今の北京にあった寺であります。そこに置かれていた『金藏』、それを宝集寺本と言っています。現在、それは北京の民族文化宮図書館に置かれています。

実は、『金藏』中の経卷は発見されたあと、太行山脈に疎開される前の間に、海外にかなり流出いたしました。ここに見えています。梶浦晋君の調査によりますと、五〇巻近く日本には流れてきており、どうやら業者がこっそり持ってきて売りさばいたようであります。現在、中国国家図書館にあります『金藏』、それは『中華大藏経（漢文部分）』というものに影印されております。それによって、『金藏』の姿が見られるわけですが、広勝寺本と宝集寺本、両方を使っております。当然のことながら、日本に流出した部分については、『中華大藏経』はその部分は影印できないので、その部分は宝集寺本で補っているというところがあります。

図7の③が広勝寺本、④が宝集寺本、同じ巻の同じ場所です。広勝寺本には、①のような扉画が付いております。これには「趙城県広勝寺」と右肩に彫られています。この扉画はあとになって、明の初めぐらいになって付けられたものようであります。

宝集寺本のほうには、②護法神王という図が扉画に付いているようです。このような「護法神王」の扉画は、『金藏』だけではなくて、ほかのものにも付いていたらしくて、当時よく普及していた扉画らしいです。これについてはいざれ調べたいと思います。

ともかく、図7—③の広勝寺本というのは、これは京都大学人文科学研究所に所蔵されているものです。そして④



② 宝集寺本扉画



① 広勝寺本扉画

是上是妙超勝一切世間天人阿素洛等復次善現若眼觸是真如非虛妄無變異不顛倒是實是諦如所有性一切常恒無變無易有實性者則此大乘非尊非勝非上非妙不能超勝一切世間天人阿素洛等善現以眼觸是所計是假合有運動乃至一切無常無恒有變有易都無實性故此大乘是尊是勝是上是妙超勝一切世間天人阿素洛等善現若耳鼻舌身意觸是真如非虛妄無變異不顛倒是實是諦如所有性一切常恒無變無易有實性者則此大乘非尊非勝非上非妙不能超勝一切世間天人阿素洛等善現以耳鼻舌身意觸是所計是假合有運動乃至一切無常無恒有變有易都無實性故此大乘是尊是勝是上是妙超勝一切世間天人阿素洛等復次善現若眼觸為緣所生諸受是真如非虛妄無變異不顛倒是實是諦如所有性一切常恒無變無易有實性者則此大乘非尊非勝非上非妙不能超勝一

大般若經卷第三 第七 第七 第七

③ 広勝寺本『大般若經』卷417

是上是妙超勝一切世間天人阿素洛等復次善現若眼觸是真如非虛妄無變異不顛倒是實是諦如所有性一切常恒無變無易有實性者則此大乘非尊非勝非上非妙不能超勝一切世間天人阿素洛等善現以眼觸是所計是假合有運動乃至一切無常無恒有變有易都無實性故此大乘是尊是勝是上是妙超勝一切世間天人阿素洛等善現若耳鼻舌身意觸是真如非虛妄無變異不顛倒是實是諦如所有性一切常恒無變無易有實性者則此大乘非尊非勝非上非妙不能超勝一切世間天人阿素洛等復次善現若眼觸為緣所生諸受是真如非虛妄無變異不顛倒是實是諦如所有性一切常恒無變無易有實性者則此大乘非尊非勝非上非妙不能超勝一

大般若經卷第三 第七 第七 第七

④ 宝集寺本『大般若經』卷417

図7

【大谷学報】79-3による。

佛所說皆大歡喜信受奉行

大寶積經卷第二十九

火九 十二末

覺驚志意驚反

捷疾才華文

踟躕上音加下音夫

最初勅賜弘教大師雕藏經板院記

潞州長子縣崔進之女名法珍自幼好道年十三歲斷髮出家  
嘗發誓願雕造藏經垂三十年方克有成大定十有八年  
始印經一藏進於朝奉勅旨令左右街十大寺僧香花迎經  
於大聖安寺安置既而宣法珍見於官中尼寺賜坐授僧法珍  
奏言臣所印藏經已蒙聖恩安置名剎所造經板亦願上進  
庶得流布聖教仰報國恩奉詔許之遂命聖安寺為法珍  
建壇落髮受具為比丘尼仍賜錢千萬兩內開賜五百萬  
起運經板至二十二年進到京師其所進經板凡一十六萬八千  
一百一十三計陸千九百八十為卷上命有司選通經沙門  
遵寺五人校正至二十三年賜法珍紫衣歸弘教大師其尊  
尊等亦賜紫衣德輝其同心協力雕經板楊惠溫等七十二人  
並給戒牒許禮弘教大師為師仍置經板於大昊天寺遂流通

図8 『最初勅賜弘教大師雕藏經板院記』  
『藏外仏教文献』第3輯1997年による。

の宝集寺本というのはチベットから発見され  
て、『中華大藏經』に影印されたもの。その  
両方を比べてみました。ご覧になったらわか  
りますように、両方とも同じ系統のものであ  
るといことはわかると思いますが、少しず  
つ違いがあります。この図版では、一行目の  
「一切」の「切」という字が、③と④とでは  
違うことがわかると思います。大体、みな補  
修を何回かしておるわけです。これはどちら  
も元も時代になつてからです。宝集寺本のほ  
うが先で、広勝寺本のほうが後だというふう  
に言われています。こういうふうにしらずつ  
補修がなされているということが、これによつ  
てわかります。

『金藏』については、最近新しい発見がありました。文化大革命の時に、柏林寺という北京の寺の仏像が破壊され  
まして、その中から大藏經の端本が出てきました。その一つに図8のような文章のあるものが発見されました。四行  
目に「最初勅賜弘教大師雕藏經板院記」とあり、これは金の時代の文章であり、そこに『金藏』のいわれが書かれて

います。始めの方に、「崔進之女法珍」、女というのは娘、名を法珍という者が、これを三〇年かかってつくったとあります。これは、前から知られていたことであります。次に、終わりから五行目の下に、「進経板一十六万八千一百一十三計陸千九百八十為卷」、経板を進む、およそ一十六万八千一百一十三、計るに六千九百八十を卷と為すとあり、これで分量がわかります。一番終わりの所に「置経板於大昊天寺」、経板を大昊天寺に置く、と書かれています。大昊天寺というのは、現在の北京にあった名刹です。経板はまずここに置かれて、そのあと弘法寺に移されました。これまでは、初めから弘法寺に置かれたという資料があり、すぐに弘法寺の経蔵に入れられたというふうに理解されていたのですが、実はまず大昊天寺に置かれて、そのあとに弘法寺に置いて、そこで印刷を行なっていたということがわかってまいりました。これは最近のニュースであります。

この『金蔵』の印刷は、金が減んだあと、モンゴルの時代、さらに元のクビライの時代までずっと行なわれました。宝集寺本はモンゴル期であり、広勝寺本は元朝になつてから印刷されたものだと言われています。

こういうふうには、第一類の『開宝蔵』は、高麗に伝わり、また金にも伝わって元の頃まで行なわれ、日本ではその書写したものが行なわれていました。

次に、宋元版大蔵経の第二類になるもの、それが『契丹蔵』というものであります。

『契丹蔵』というのは、毎行二七、八行で一行が一七字、やはり卷子本であります。千字文帙号が第一類、第三類とは違ひまして、『略出』より一字繰り下がります。これまで『契丹蔵』については、『東洋学報』二一三に妻木直良氏の「契丹に於ける大蔵経雕造の事実を論ず」という大正元年（一九二二）の論文があります。これによって、文献上、『契丹蔵』が雕造されたということはわかっていたのですけれども、実物は残っていませんでした。私の「契丹



図9 契丹藏『中阿含經』卷第三十六  
(応県木塔発見)『文物』1982-6による。

全く世の中にないと思っていました。実は七四年にそれが発見されていたのです。しかし、発表されたのは八二年であります。最早、私の論文は不要になってしまったのかと思つたのですが、見たら、一行一七字であり、私の推測が間違つていなかったことを証することになりました。

図9が発見された『契丹藏』であります。その特徴は一行一七字で一四字ではありません。それから、全部ではありませんけれども、始めと終わりの経題の所に縦の野線が入っています。これは一つの特徴であります。それから、『中阿含經』の二行目の真ん中辺に「涅盤」というのがあります。「はん」の字は普通は「槃」です。ところがこれは「盤」になっています。これも大体契丹の時の特徴であります。これが発見されました所は図10の木塔であります。

大藏經小考」というのも、世の中には『契丹藏』というものは残っていないという前提の下に、それは一行一七字であつたらうという推定を行なつた論文であります。そして、あるいは冊子本であつたかもしれないというふうにも推測いたしました。

ところが一九七四年に山西の応県仏宮寺の木塔から仏典が発見されました、刻経四七点の中で千字文帙号を有する経、つまり大藏經の端本と見られるものが一二巻出てまいりました。一番早い刊年は統和二一年(一〇〇三)です。この報告が出ましたのが一九八二年の『文物』第六期であります。この論文が出て私はびっくりしました。私の論文は七八年に書かれましたが、その時私は『契丹藏』は



図10 応県仏宮寺木塔

これは私が撮りました写真ですので上がちよん切れておりますが、この四階から出てきました。これは木造の塔でありまして、中国では木塔というのはあまりなく、一番古い木塔だというふうに言われています。また「中阿含経」の紙背には「神坡雲泉院藏経記」というハンコが押されています、大藏経の一部分であることがわかります。

図11は「法華経」でありまして、これは単刻本であります。これには非常に精緻な扉画が付いております。注目すべきことは、一番上の所に「妙法蓮華経妙音菩薩品第廿四」とありまして、その下に「八」という字があります。中国では敦煌写経では「法華経」は七卷本、八卷本、十卷本とあります。十卷本というのは北朝時代が中心で、唐代で

は圧倒的に七巻が多くて八巻もありません。ところが、宋代以後になると、完全に七巻本になっています。

それに対して、日本では八巻本がずっと行なわれました。「法隆寺一切経」なんかでもそうであります。日本は八巻、中国は七巻。ところが応県木塔から出てまいりましたものは八巻が多く、遼の時代には日本と同じような傾向があったということがこれでわかります。

「法華経」については、故兎木正亨



図11 遼刊本『妙法蓮華經』卷第八（応県木塔発見）『文物』1982-6による。

氏が精緻な研究を行なってこられました。ただ、これが発見される頃に亡くなられたため、これには気づいておられないわけです。応県というのは山西の五台山より北にあります。山西という所は、どうもそういう点でいろいろと珍しい文化財が出てくる所であります。

ところが最近になりまして、今度は一九八七年に河北の豊潤県天宮寺という所の仏塔から版経が一〇点発見されました（図12）。この図は『文物春秋』（一



図12 豊潤県天宮寺塔  
『文物春秋』1989年創刊号による。

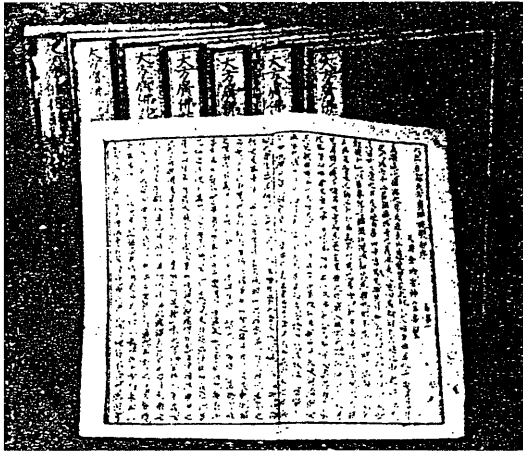


図13 冊子本『大方広仏花嚴経』(1042年刊)  
『文物春秋』1989年創刊号による。

九八九年、創刊号)から採りました。この塔は煉瓦造りですが、唐山の大地震で壊れました。それで、その塔の上のほうから経典が発見されました。豊潤県というのは北京市の東の方にあります。そこに図13のような「華嚴経」が出てきました。これも「八十華嚴」であります。これは冊子本で、一冊に一〇巻入っています。そして全部で八冊になっている、というものが出てきました。これには、しかも千字文帙号が入っております。そして、つくられた年が重熙十一年(一〇四二年)です。

契丹、あるいは遼と言っている国は、華北を含む地域を支配していたモンゴル系の民族、契丹族というのが建てた国家であります。そういう国は、中国に比べて非常に文化が劣っているような印象を受けるのでありますけれども、そうではなくて、特に北京辺りの所では非常に印刷文化が進んでいたことが、この発見でわかります。

それと同時に驚くことは、図14は「大方広仏花嚴経随疏演義鈔」ですが、これは応県木塔から発見されたもので、遼で印刷されました。それが高麗に伝わり、そして高麗で義天がそれによって覆刻したのが、前述の「統蔵本」であります。それが東大寺に入りましたから、華嚴学の重要なテキストになって、宗性なんかこれを非常によく利用しました。



智正覺世間主亦極化上二遍統前三故云並稱世  
 主法門依正俱曰妙嚴者此嚴亦說三世間嚴法門  
 爲能嚴唯局於主依正所嚴通三世間衆生及佛俱  
 稱正故謂諸世間主得別法門自嚴已衆耶衆生世  
 間嚴並用嚴佛亦智正覺嚴佛成正覺是自法門是  
 故能令其身充滿一切世間其音普順十方國土菩  
 薩衆中威光赫丹等即智正覺世間嚴其地堅固金  
 剛所成上妙寶輪及衆妙花清淨摩尼以爲嚴飾等  
 即器世間嚴器世間嚴通二法門一佛力令嚴是佛  
 自嚴二感者觀見是衆海法門嚴是故極云法門依  
 正俱曰妙嚴三世間嚴並勝餘教故標妙嚴以爲品  
 目用當諸經之序分也餘如下說

大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔卷第一上

図14 遼刊本『大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔』卷第一（応県木塔発見）

つまり、日本の中世の華嚴学のルーツを遡っていきましたら、高麗に、高麗より更に遼にたどり着くというルートが明らかになるわけであります。

『契丹藏』というのはそういうものでありまして、実は契丹仏教というのが日本の仏教のルーツの一つになるということがこれで明らかになってまいりました。

宋元大蔵經の第三類というのは、每版三〇行で一七字、折帖。折帖というのはアコードオン式の折本のことです。仏典の場合、大体皆こうなっています。

その装丁で、千字文帙号が『略出』と同じであるという事です。実はこの系統のものは江南と呼んでいる地方で出版され、わが国に伝わる宋元版大蔵經はすべてこの系統のものです。その最初のものは、福建福州

の二つの大蔵經です。その一つは、東禪寺で北宋の元豐三年（一〇八〇）に始まり政和二年（一一二二）に

完成したものです。崇寧二年（一一〇三）に徽宗皇帝から「崇寧万寿大蔵」の名を賜りましたので、『崇寧蔵』といいますが、わが国では「東禪寺版」とよんでいます。完成後も南宋から元代にかけてたびたび補修が行なわれました。

『崇寧藏』が完成したその年に、同じ福州の開元寺でも開版が始められました。巻首の題記に「毘盧大藏經」とあることから「毘盧藏」といい、わが国では「開元寺版」と言っています。これも南宋末まで補刻が行なわれました。

両藏ともわが国に多く舶載され、諸寺の経藏に現存していますが、いずれも両方の経を合わせた混合藏です。なお『大正藏』の校本<sup>㊦</sup>本は、宮内庁書陵部所藏のこの福州版を指します。

第二は、浙江湖州の思溪円覚禪院で、密州觀察使致仕（退官）の王永徒ら一族によって、北宋末から紹興二年（一一三二）頃までにつくられた『思溪藏』です。これには二種の目録が現存するため、前思溪版と後思溪版の二種の大藏經がつくられたとみられたことがありますが、現在では、『思溪藏』は一種だけであって、それが南宋末まで補刻されたものというふうに言われております。南宋末の戦乱によって、その版木は焼失しました。『大正藏』校本の<sup>㊦</sup>は、東京増上寺所藏のこの大藏經です。

第三は、平江府（今の蘇州）の磧砂延聖院で開版された『磧砂藏』です。はじめ嘉定九年（一二一六）から紹定二年（一二二九）の間に『大般若經』一二巻が開版されましたが、なかなかはかどらなかつたためか、巻一三からは趙安国の「一力刊經」となりました。開版は咸淳八年（一二七二）までつづきました。その後の戦乱で一時中止になりましたが、元の大徳元年（一二九七）に再開されました。一九六六年、北京の柏林寺で、明の永楽七年（一四〇九）から十年の間に補刻され、宣徳年間（一四二六―三五）に印刷したものが発見されました。この大藏經は、追雕と補刻とを重ねながら、宋、元、明の三朝二〇〇年間を生きてきたものであります。一九三二年、西安の臥龍寺と開元寺とでこの大藏經が発見され、三四年から三六年にかけて、『影印宋磧砂藏經』として影印出版され、容易に見ることができるようになりました。わが国に伝わるものは少なく、まとまったものとしては、大阪の杏雨書屋に所藏のもの

があるだけです。

第四は、元の至元十四年（一二七七）から二十七年（一二九〇）の間に、杭州の南山大普寧寺で開版された『普寧藏』です。これは、『思溪藏』の版木が戦火で焼失したので、杭州諸山の徳徳たちがその再刊をはかり、新興の白雲宗教団に協力を要請したことに始まりました。白雲宗というのは、北宋末に孔清覚が創めた教団で、江南地方に教線を張っていましたが、宋代では邪教とみなされて弾圧されていました。したがって、この要請は教団にとつて願ってもない好機でありました。早速上京してクビライの許可を取りつけ、浙西の豪民層の施捨をうけて開版しました。この大藏経は、金さえ出せば容易に入手できたので、華北の諸寺もこれを購入して持ち帰りましたし、高麗国王王璋は、五〇藏をつくって江南の諸大刹に寄進しました。わが国にも多く舶載されて現存しています。『大正藏』校本の④は、増上寺所藏のこの大藏経です。

重要なのは、「元官藏」というものであります。元の時代の大藏経につきましたは、『大谷学報』（七九―三、二〇〇〇年）に「元代の大藏経」、これは講演の筆記なのですが、そこで書いておられますので、詳しくはそれをご覧ください。だきたいと思えます。

元朝の時代には、先ず中国で『延祐藏』と言っているものがござります。これは、延祐三年（一三一六）に三六藏を刊行しました。そのものが北京の智化寺という所から、一九八四年に発見されました。智化寺は北京の元の城内の東南にあるこじんまりしたお寺であります。これは明の時代に宦官が建てた、ある意味では瀟洒なお寺であります。そこは仏教音楽で有名な寺でございます。宦官でありますから、明の時代の宮廷音楽を仏教音楽に取り入れて、それが現在まで伝わっています、ここへ行きましたらそのカセットを売っております。『延祐藏』はそこで発見されま

藏庶衆善所積百福滅臻伏願  
皇帝萬歲

太子千春聖子神孫同膺上壽尚希  
餘慶施及遺黎均蒙

覆育之仁共樂無為之化

至元二年歲次丙子四月吉日誌

菩提場莊嚴陀羅尼經

大事志

將運護國體聖典華手藏沙門益隆撰著

如是我聞一時薄伽梵住筏羅兜斯大城廣  
博大園與苾芻衆五千人俱皆是大阿羅漢  
諸漏已盡所作已辦速得已剎斷諸有結復  
爾菩薩摩訶薩五百人俱

爾時世尊滿月十五日而坐說法其衆會有  
鉢曇俱底那更多百千有情婆羅門刹利梵  
志尼乾子學及餘外道戲論的指居苑林納  
衣持牛戒者居相合寺壁用字變見大天皮

図15 元官藏『菩提場莊嚴陀羅尼經』卷首『文物』1984年12期による。

した。

そのほかに、一九七九年に中国で「元官藏」と言っております、雲南図書館から三二巻のものが発見されました。それは毎版四二行で一行一七字。図15の真ん中に「大大德寺」というハンコが押されております。大德寺というのは、北京——この時代は大都と言っておりますが——にあったお寺であります。そのものが雲南に運ばれていたのです。これについては、「文物」一九八四——二の「元代官刻大藏経的発見」という論文に発表されました。図15の右側にある刊記、そこに後至元（一三三六年）の太皇太后ブタシリ願文が書かれています。この部分が昔、日本に入ってきておりました。これは小野玄妙——「大正蔵」の編纂を中心になつた方であります——の、「元代松江府僧録管主八の刻蔵事蹟」（『仏典研究』二——三、一九三〇）という論文がございます。その中に掲載された図版が図16です。これは「東京中谷在禪氏蔵」となっております。その願文が図15のと同じです。また「銓経講主」云々というのも一緒なんです。つまり、この

景既於是印施

三乘聖教經律論賢聖集凡三十  
藏庶衆善所積百福成臻伏願

皇帝萬歲

太子千春聖子神孫同膺上壽尚希  
餘慶施及遺黎均蒙

覆育之仁共樂無為之化

至元二年歲在丙子四月吉日誌

鈐	任	講	主	惠	濬	能	吉	祥
鈐	任	講	主	德	琛	如	釋	
鈐	任	講	主	津	瓊	興	法	
鈐	任	講	主	雲	澤	明	辯	
鈐	任	講	主	淨	瑜	德	彦	

(藏氏譯在谷中京東) 經藏大阪官刊年二元至宗順元

図16 元官藏太皇太后願文『仏典研究』2-13による。

願文とこういう刊記の所だけが日本に伝わってきたらしいのです。これが現在どこへ行っているのか。どこからか出てきたらありがたいと思います。このように、日本にも『元官藏』というものが伝わっていた形跡が残っております。

そればかりではございません。一九八三年に村井章介氏、現在は東京大学文学部の教授であります。史料編纂所におられた時に、対馬で『八十華嚴』を発見されました(『仏教史学研究』二二八―二)。それが図17。これも版式をご覧になったらわかりますように、上下に二重の罫線が入っています。そして終わりの所に「大明国蘇州」とあり、蘇州で寄進したもの、しかも最後の所に、「建文參年」と書いてあるんです。建文帝というのは次の永樂帝によって抹殺された皇帝でありまして、建文というのは抹殺されたというので、墨で消してあるというところが非常に面白いのですが、それがどういうルートで伝わったのでしょうか。「対馬州二位郡津奈村観音寺之常

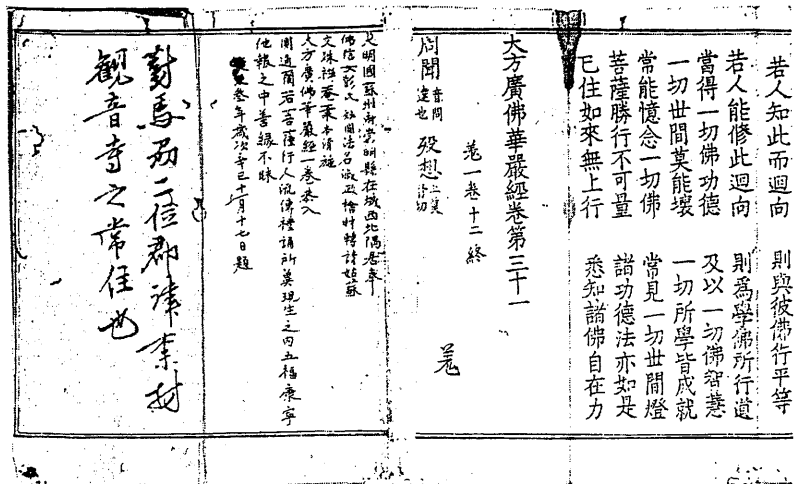


図17 元官蔵『大方広華嚴経』卷三十一 卷尾『仏教史学研究』28-2による。

住也」と書いてありますが、これが東泉寺という無住の寺から発見されました。これは現在、対馬の歴史資料館に置かれていますが、私も村井さんの紹介を受けて、そこでこれを見てまいりました。非常に幅の広い、しかも白い立派な紙で印刷してありまして、見るからに官蔵であるということがわかります。どうして対馬に行ったのか。朝鮮を回っていった可能性が一番強いわけであります。

村井さんが八三年にそれを発見しました。そして、同じ官蔵がそのあくる年に『文物』で紹介されました。何かそこら辺にも奇遇というものを感じるわけであります。実は『華嚴経』には「六十華嚴」というのが一番古い。その次が則天武后の時代に訳されました「八十華嚴」。そしてもう一つあとに「四十華嚴」という四十巻のものとは三種類あるのですが、「八十華嚴」が一番後々まで流行いたします。その「八十華嚴」が対馬にありました。

それだけではなくて、図18は、京都の緒方香州さんが所蔵されているものです。前後比べていただいたら、対馬のものとは全く同じ版式であるということがわかります。この写真は緒方さんから

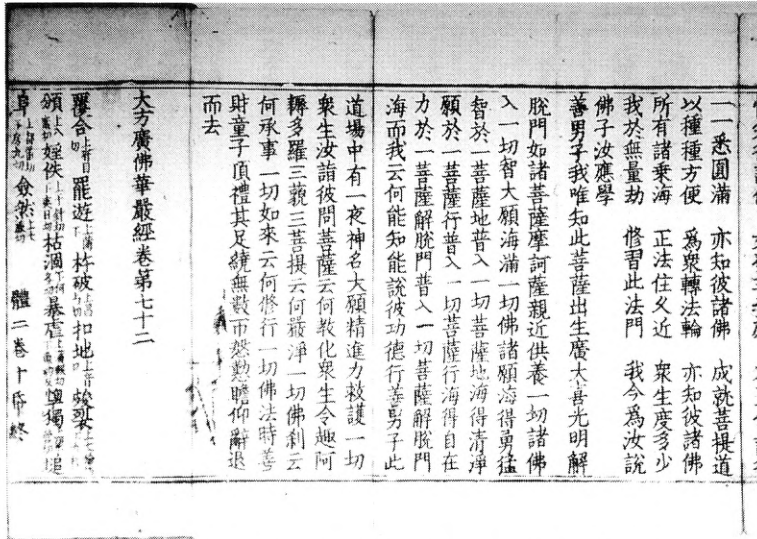


図18 元官蔵『大方広華嚴經』卷第七十二（緒方香州氏蔵）

いただいたものであります。これがどうして緒方氏の手に入ったのかというところまでは、聞いておりません。ともかく、対馬だけではなくて、京都にもこれがあるということであります。

急いで話をしてみました。こういうふうに見てまいりますと、宋から元の時代の中国で出版された大蔵經というものが、日本に多く影響を及ぼしているということがわかります。

そればかりではございませんで、私は今年の八月の終わりに、龍谷大学のプロジェクトの一員として旅順博物館に行つてまいりました。そこに、大谷探検隊が中央アジアで収集しましたお経の断片を集めたものがあります。その調査にまいました。版経の部分は二冊の資料集にまとめられておりました。それを見てまいりましたら、その中には「開宝蔵」と見られるもの、それから、「契丹蔵」と見られるもの、そういうものも入っております。これはまだ未公開であります。いずれは報告集になると思えます。

ああいう中央アジアの方にまで、中国で出版された大蔵経が伝わっていました。それが東は日本に来ております。こういうふうに見てまいりますと、このような仏典というものは一番文化交流の証であり、重要な非常に確実な史料ということになると思います。仏典なんか一般の歴史家はあまり関心を持たないのでありますが、これによって、今見てきましたように、仏典というものを通じて中国、あるいは北アジア、朝鮮半島、日本、それから中央アジアというふうに、非常に広い範囲の文化交流が行なわれていたということが明らかになるわけです。

そしてまた、日本仏教のルーツというものを、これまでは中国の方ばかりを見ておりましたが、実際には非常に大きな影響を与えたのは朝鮮、特に高麗時代の仏教です。新羅、高麗の仏教というのが日本の仏教に影響を及ぼしました。それから更に、その北にありました契丹の仏教が、日本の仏教に影響を及ぼしているようなことも、こういう文物を通じて明らかになってくるわけです。今後、またこのような発見がみられると思いますが、そういうものを通じて、日本仏教文化の広がりや深まりとが明らかになっていくことを、私は期待しているわけです。

非常に大雑把なお話でございましたけれども、これで終わりにしたいと思います。どうも御静聴ありがとうございました。(拍手)